



昭和年代の社会教育協会

～思い出すままに～

石川県社会教育協会顧問 道端 孫左エ門

私が社会教育協会へ加入したのは教育現場から県教委へ転じた昭和32年4月だった。以来60年近い会員歴である。

当時の県教委は、金沢城の石垣の下、現在は堀になっている旧軍隊の2階建ての兵舎を使っていた。

教育長は中谷久弥さん。社会教育課長は川崎政雄さんだった。初対面の川崎課長に挨拶すると、「よう、道端君か、川崎一座へようこそ歓迎するよ。あんた講演も得意やそうやな、結構々々」と云われた。社会教育課を一座と表現するように、当時の社会教育課は行政組織であるとともに、民主主義の普及啓蒙のための県立の講師集団のような色彩がまだ残っていた。

占領軍GHQの方針を受け、知事を会長として市町村代表、教育界代表、経済界代表等の網羅官製団体として発足した社会教育協会は、昭和23年9月、民間社会教育団体として脱皮再出発したとは云え、行政の社会教育課の補完講師団体のような色彩を色濃く残していた。

協会長は笠森伝繁さん、副会長は津沢佐正・中村禎雄のおふたり、社会教育課の北周一郎大先輩が司令役だった。総会の時など、北先輩の令一下、私も朝倉良夫、毛利尚男、光岡篤次といった若手の課員と一緒に会場づくりに汗を流した。

県外大学勤務の笠森会長に代わって、日常的には津沢副会長が取り仕切っておられ、年に1～2回ぐらい石引4丁目の津沢さんの自宅でご馳走になった。こんな時、金沢市の宮竹広春さん、県立図書館の芳井先一さんも加わっていた。

昭和39年、県教委から教育現場に帰って、次に協会と関係深い仕事に就いたのは、昭和48年4月、新設間もない本多町の社会教育センターと県立図書館の副館長に就任した時だった。

協会の会長は吉田他吉さん、吉田さんは昭和20年代、私の勤務校のPTA会長であり、昭和30年代県教委でPTA事務を担当した時は、県PTA連合会相談役を努めておられ、教育委員長として指導を受けた方だった。新任の挨拶に伺うと「道端さんか、良い人が副館長に来てくれたな、社教センターが開館して社教団体の多くが事務局を置き、集会や会議の多くもセンターで開かれることが多いんだ。協会の事務局も社教センターへ移してはどうかね。」と一気に話され、「いずれ国田館長にもお願いするけれども、頼むよ。」と念をおされた。

こうした経緯から、この年から協会事務局が社教センターに移ったのだった。協会副会長に社教センターの国田館長が新しく就任し、当時は事務局長制度が無かったので副館長の私が理

事に入って実務を分担、センター事業課の大野課長が庶務を、図書館の清水課長が会計を分担、事業課の宇野、社会教育課の高西のおふたりを幹事に委嘱する等一連の事務局態勢を整え、吉田会長を尋ね報告すると、「ご苦労さん、これで私の仕事は終わり、明治は遠くなりにはけりだよ道端さん。」と云われたのが気になったが、その年の秋に訃報を耳にすることになった。

吉田会長の後、昭和49年永守良治さんが会長に就任、永守さんは私の学生時代の主任教授であり、永守会長の意向で幹事に市町村代表を加え、幹事長を新設することとなった。こうして金沢市の湧田、河内村の山岸、鹿西町の池本さんの3人に幹事に加わっていただき、幹事長に竹沢喜太郎さんが新任した。

竹沢さんは高齢でありながら、毎日のように副館長室へやって来られて、すこぶる熱心なお仕事ぶりに敬服させられた。昭和55年、再度行政から教育現場へ復帰して、協会へは年1回の総会に出席したり、『接点』に寄稿する程度の会員であった。

昭和も終わりに近い昭和62年、私が県PTA連合会の事務局長に就任した時から再々度協会と深く関わることになった。この頃の運営はすべて副会長の谷口正幸さんが中心であった。

昭和も63年で終わり、平成年代も今や30年に近い。昭和年代、その時々協会の継続と発展に尽力された方々も鬼籍に入られた。「昭和は遠くなりにはけり」の感が深いこの頃である。